

万葉集の語と歌句表現に見る「岩」

The “rock” observed in vocabulary and poetic expressions in *Manyōshū*

王 秀梅

WANG, Xiumei

同志社女子大学現代社会学部

(Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts)

Abstract

This study aims to reveal how ancient Japanese people perceived geological characteristics, investigating the vocabulary and the expressions of “rock” in *Manyōshū*. The analysis categorizes 140 instances of 45 different words related to rocks found in 133 poems based on word structure and meaning. This paper also explores the distribution and poetic expressions of these words across the divisions of *Manyōshū*. Key findings reveal that among the “Iha” series words, the usage frequency of “iha”, “ihane”, “ihaho” and “tokiha” is high in *Manyōshū*. Furthermore, the number of instances of “rocks” referred to by these words is highest in “Somon” (romantic exchange of poems), but in “Ban-ka” (elegy, mournful poems), although their total number of instances is low, their proportion remains high. Rocks in poems symbolize obstacles to love and progress, and represent solidity in nature. They are also considered as an alternative world different from reality (such as the land of the dead) and as a symbol of eternal, unchanging scenery and landscapes. The connection between rocks and ancient Japanese culture reflects the geological characteristics ingrained in Japanese society.

要旨

古代日本人の地質や地形に対する関わり方、考え方を万葉集の歌に見える「岩」の語と歌句から検討した。万葉集中、「イハ系列語」45語は、133首の歌に計140例が挙げられる。本稿はそれらを語構成・意味属性の観点から分類した上、万葉集の部立分類に合わせて、その分布状況と詠まれた歌句の表現類型について考察し、次の結論を得た。歌句において使用頻度の高い語は、「イハ」、「イハネ」、「イハホ」、「トキハ」等である。部立分類で見れば、「岩」は相聞歌の歌句に最も多く現れるが、各部立内で占める割合と合わせて見れば、「岩」は挽歌に出現する頻度が高い。歌句に見える「岩」は主に、①険しい山道を構成し、恋や前進を阻む象徴、②水流などとの自然作用を心情に譬える際は、堅固の象徴、③現実世界と異なる空間、④風景の一部で永久不変の象徴、として詠まれており、「岩」と古代日本人との様々な繋がりが、日本文化における地質学的特質を反映している。

摘要

为了解古代日本人对地质的认识、发现日本文化中的地质特性，本文以岩石为例，从语言文学的角度对万叶集中表示岩石的“イハ系列词汇”及歌句进行了调查分析。从词语结构和词义属性上对出现在133首140例的45个“イハ系列词汇”进行分类后，结合万叶集的部位分类对其分布情况、歌句中的表现类型进行了归纳，得出以下结论：1. 植物名称、地名等专有名词之外的“イハ系列词汇”99例中，使用频度较高的主要是“イハ”“イハネ”“イハホ”“トキハ”等词。2. “イハ系列词汇”的歌句，从部位分类来看在“相闻”歌所占比例最高。而结合各个部立的歌数在万叶集中的比例来看，“イハ系列词汇”在“挽歌”中所占的比例高于它在其他部立中所占的比例。3. 歌句中主要的岩石意象如下：(1) 指代险峻的山路、比喻阻隔爱情或前进的困难，表达歌者不辞辛劳渴望与恋人相聚的心情，或刻画男子不畏艰难的形象。(2) 与岩石的坚固稳定相对比，以水流与岩石的自然作用、地形变化比喻跃动、悲伤、隐忍、坚定等种种心情。(3) 将岩石周边描述为不同于现实世界的空间，反映了古代日本人对异界的认识和想象。(4) 构成景物景观，象征永恒不变，是歌者抒发情感、寄托祝福、令心灵得到慰藉的地质产物。

1. はじめに

日本最古の歌集である万葉集には、山谷、河川、岩石、鉱物など地質学的要素が詠まれた歌が数多くある。古代日本人の地質や地形に対する関わり方・考え方を語学文学の観点から探るべく、筆者は令和4年度日文研共同研究の口頭発表において、古辞書に見る地質的要素の分類および上代文献に見る「イハ系列の語」を概観した上、万葉集中の「岩」の歌について、題材の取り合わせと歌の表現類型（視点1）、歌の文字表現・解釈と漢籍の受容（視点2）という二つの視点から検討を試みた。視点2では、巻八の巻頭を飾る志貴皇子の「さわらび」歌を取り上げ、初二句「石激垂見之上乃」で描かれた景観空間について、本文の文字表現と漢籍の「激石」「飛泉」「薇蕨」との対応関係に注目して解釈する可能性を提示した。詳細は別稿にゆずることにして、本稿では主に視点1の考察を踏まえて、万葉集中の「岩」を表す語や歌句表現が歌の中にどのように現われているのか、万葉人は「岩」をどのように捉え、どのようにかかわっていたのか、全体の傾向について考察したところを述べる。

現代日本語の「岩（イワ）」という語は、狭義では古代の「イハ」という語と対応するが、本稿でいう万葉集の「岩」は、「イハ」という単純語の他、「イハ」の語素を含む「イハネ」「イハホ」「トキハ（トコイハ）」などの複合語も含めて指している。それは、上記の複合語が語構成と表現上、単純語「イハ」と切り離

せない関係性をもち、そして、量的検討にも堪えるためである。本稿は、これらの語をひっくるめて「イハ系列語」と称すが、語形を区別して分析する時は、それらをカタカナ表記で示して説明する¹。歌句表現の分析において、用例は各語形の語を整理して提示するが、本稿は上記の諸語を含む歌の根底に共通する「岩」の文化的属性を見出すことに主眼を置くので、これらの「イハ系列語」を含んだ歌総体を指して、「岩」の歌と帰納している。

本稿の挙例の揭示形式についてもここで断っておく。周知のように、万葉集の歌はすべて漢字で書かれている。「イハ」という語・語素は、万葉集では「伊波」「石」「磐」「盤」「巖」などの文字によって表記されている。以下、[例示1]では歌句単位で万葉集の本文表記/訓み/訓み下し文の順で数例を示して、[例示2]では「岩」の歌何首かを訓み下し文のみで示しておく。歌の本文表記は埴書房『萬葉集本文篇』、訓み下し文は小学館新編日本古典文学全集『萬葉集』に基づく²。

1 現代語で岩石の類に入るものを広く拾うと、万葉集には、海や川などの水辺の岩石を指す「イソ」や、海中の岩石・暗礁を意味する「イクリ」などのような語も挙げられる。岩石類の語に対する古代日本人の認識は、平安時代の古辞書『倭名類聚抄』の巻1・地部第2「巖石類」に採録された語彙から一部窺える。その中には現代語で言う巖、岩、石、砂などが含まれている。

2 [例示1]において、歌句に対する訓みを片仮名で示した。小学館当該テキストの訓み下し文は全ルビ付形式

【例示1】万葉集本文表記 / 訓み / 訓み下し文

- イ) 伊波毛等杼呂尔 / イハモトドロニ / 岩もとどろに(14・三三九二)
- ロ) 伊波祢左久美豆 / イハネサクミテ / 岩根さくみて (20・四四六五)
- ハ) 瀧都山川於石觸 / タギツヤマガハ イハニフレ / 激つ山川 岩に触れ (10・二三〇八)
- ニ) 石淵隠而耳八 / イハブチノ コモリテノミヤ / 磐淵の隠りてのみや (11・二七一五)
- ホ) 磐走淡海乃國之 / イハバシル アフミノクニノ / 石走る 近江の国の (1・五〇)
- ヘ) 常石有命哉 / トキハナル イノチナレヤモ / 常磐なる命なれやも (11・二四四四)
- ト) 河上乃湯都盤村二 / カハノヘノ ユツイハムラニ / 河上のゆつ岩群に (1・二二)

【例示2】万葉集の「岩」の歌 (訓み下し文のみ)

- チ) 落ち激ち 流るる水の 岩いはに触れ 淀める淀に 月の影見ゆ (9・一七一四 作者未詳 幸芳野離宮時歌二首 その二)
- リ) …真木立つ 荒き山道を 岩いはが根ね 禁樹きんじゆ押しなべ 坂鳥の 朝越えまして 玉かぎる 夕さり来れば み雪降る… (1・四五 軽皇子宿于安騎野時 柿本朝臣人麻呂作歌)
- ヌ) かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の 岩根いはねしまきて 死なましものを (2・八六 磐姫皇后 思天皇御作歌四首 その二)
- ル) 巖いはほろの 沿いはほひの若松 限りとや 君が来まさぬ うらもとなくも (14・三四九五 東歌)
- ヲ) 常磐とこしほなす かくしもがもと 思へども 世の事なれば 留みかねつも (5・八〇五 山上憶良 哀世間難往歌 反歌)

本章以降の考察では、煩雑を避けるため、基本的には元の本文表記を提示せず、語形を区別して示す際はカタカナ表記で、歌句の内容や表現に関わらせとなっているが、本稿では、ふり仮名は例示目的以外、一部の難読箇所だけに施し、他は省いた。訓み下し文は、注釈者の意味解釈や表記方針を反映するもので、そこに使用している漢字は、「イハ」「イハホ」「トキハ(トコイハ)」に対する「岩」「巖」「常磐」などのように現代日本語に共通するものが多い中、(二)ホ)のように、元の本文表記とも異なる「石走」「磐淵」で表記されるなど、注釈書によって異なる場合も少なくない。

て説明する際は、上記イ)～ヲ)に示した訓み下し文(漢字仮名交じり文)形式で歌句や歌を示す。

万葉集の「岩」について、個々の歌の中で言及する先行研究は枚挙に遑がないが、「岩」そのものに光を当て、集中の用例全体を対象とする論考は管見に入らない³。歌の内容に注目すると、「岩」はそれぞれの歌において異なる表情を見せていることは、上記チ)～ヲ)などの歌からも窺える。全四千五百余首の歌の中で「岩」はどのような存在であったかを知るには、量的比較分析が必要である⁴。万葉集には、三百数十年という長い年月にわたる作品が集められており、作者層も広範にわたるので、歌一首一首を真に理解するには、作者がどのような場面状況でどのような心情を詠んだものか、その一首のみならず、歌の配列や巻の特徴などからも読み解かなければならないが、本稿は、万葉集中の「岩」を把握する第一歩として、まず語彙と歌句単位の分析から、全体の傾向を掴むことを目標にして考察する。

語と歌句の依拠テキストは、上記の例示で使用した、西本願寺本を底本とする、新編日本古典文学全集『萬葉集』(小学館)とする。用例の収集にあたって、『時代別国語大辞典(上代編)』の見出し語を参考にし、同じく西本願寺本を底本とする塙書房『萬葉集 本文篇』、塙書房刊古典索引刊行会編『萬葉集電子総索引CD-ROM』を語の検索に、和泉書院『新校注万葉集』

3 岩石類に関する叙述から古代日本人の岩石観を分析する最近の論考として、吉野政治(2018)、吉川宗明(2022)が挙げられる。吉野政治(2018)は、古代から現代にいたる鉱物関係の語彙を広く収集して示しており、第一章「日本の岩石観」では、万葉集を含む上代文献の用例も取り挙げ、巖、岩、石、砂などのかかわりに関する日本人の考え方を通時的観点から考察している。吉川宗明(2022)は、記紀風土記における岩石類の記述について、岩石信仰の角度から網羅的に整理して、人が岩石に対して抱く精神性、ほかの自然環境との関係性などについて分析している。

4 「岩」に関するものではないが、岩との関係性が高い「山」について、万葉集中の全用例を研究対象とする出田和久(2006)の論考が挙げられる。同論は、万葉集に詠まれた山から古代人の景観・風景に対する認識のありようを解明しようとしたもので、同じ山の詠まれた方の差は「景観を見ている人の文化的なコンテクストと密接に関わる」ことなどを論じている。作者やその所属階層・地域集団と関連付けて検討すべきと述べている点は、地質の文化的要素を考える際にも必要な視点だと思われる。

を校合に利用した。

2. 万葉集における「イハ系列の語」

単純語「イハ」の用例は十数例しかないが、複合語を入れて見ると、イハ系列の語を用いた歌は、万葉集において全部で133首、計140例を数える⁵。歌句表現や内容の分析は、本稿では植物名・地名以外の語によって検索された93首、計99例の歌を範囲とするが、イハ系列の語全体の語形と用例分布について、ここで植物名・地名の語も含めて示しておく。

2-1. イハ系列語の語構成分類と用例分布

万葉集におけるイハ系列語は、語構成・意味属性の観点から、第1表に示す[1]～[7]の7種に分類することができる。単純語[1]以外の、[2]～[7]のイハ系列語は複合語にあたる。語の認定は、『時代別国語大辞典(上代編)』(以下、時代別上代編と略す)の見出し語を基準にしているが、一部変更点もある⁶。

第1表 万葉集イハ系列語の語構成別集計

語構成分類	異なり語数	用例数
[1] イハ[格助詞後接例]	1語	計 17例
[2] イハ+動詞活用形	7語	計 13例
[3] イハ+接尾語	7語	計 37例
[4] 接頭語+イハ	1語	計 10例
[5] イハ+名詞	11語	計 22例
[6] 固有名詞 地名	11語	計 30例
[7] 固有名詞 植物名	7語	計 11例
	計 45語	合計 140例

第2表の用例分布一覧に見るように、[1]に分類した例の中に、歌の音数律の関係で格助詞が省略されていると思われるものも含まれている。それらは、形態上、[2]と同様、動詞活用形を後接しているため、語の認定において、1語として見るべきか、語句・歌句として見るべきか、直ちに判断しかねる例もある。本稿の語構成分類別の用例分布一覧は、便宜上、

5 「…岩が根の ごとしき道の 石床の 根延へる門に…」(13・三三二九)に「イハガネ」「イハトコ」の2例が見えるように、同一の歌にイハ系列の語が複数用いられる場合がある。同様な歌は他に6首ある(植物名の歌1首含む)。

6 時代別上代編の見出し語に地名は掲げられていない。[6]の地名の漢字表記は依拠テキストの訓み下し文・付録にある「地名一覧」の表記に従っている。

語形と用例分布の傾向を示すためなので、暫定的な処理を施し⁷、第2表において[1][2]に該当する例はどちらも歌句ごとに掲げた。

第2表の用例分布から看取するように、歌に現れる「岩」は、[1]に見る単純語「イハ」(計17例)に加えて、複合語では[3][4]に入る「イハネ」(計14例)と「イハホ」(計12例)および「トキハ」(計10例)が、使用頻度の高い語形と見て取れる。

[2]のうち、「イハバシリ」1例、「イハバシル」7例と2語で分けているのは、時代別上代編の見出し語の分類に従ったものである。後掲する、本稿第5表の用例(12) 15) 16) 17) 19) 28) 29) 30)の8例にあたるが、時代別上代編では、15)の「イハバシリ」を動詞として、それ以外の7例を枕詞としている。枕詞は、和歌において特定の語の前に置いて語調を整えたり、ある種の情緒を添える言葉で、意味関係でかかると、音声関係でかかるとに分かれる。垂水・滝にかかる「イハバシル」は、動詞例との間に意味解釈上の違いは必ずしも明確ではないと思われる。「イハバシル」の意味としては、従来「岩の上を走り流れる」、「水が岩石にぶつかって激しく飛沫をあげる」という2種類の解釈があるが、諸注釈の多くは後者を探っている。井手至(1959)は後者の意味を論証しており、時代別上代編の解釈もそれを踏襲しているとみられる。

7 語の認定と用例数集計は、用例によって歌の解釈と併せて考える必要があり、その解釈や訓みの同定が複雑なケースもある。例えば、時代別上代編において、第2表に挙げた[2]「イハ+動詞活用形」にあたる語のうち、「イハバシル」においては、動詞と枕詞とで分けて見出し語を2語で示しており、[3]の「イハホ」においては、それに基づく枕詞「イハホナス」(孤例)を見出し語として改めて掲げている。一方、「イハクエ」「イハタタミ」は見出し語に挙げているが、同じく孤例にあたる「イハカマヘ」「イハダケル」は掲げていない。判別しにくい点もあるが、「イハダケル」については、「イハソソキ」「イハバシリ」の例に倣い、「イハクエの」「イハタタミ」と併せて[2]に入れた。但し、「イハ踏み平らし」のように、明らかに歌の音数律の関係で格助詞が省略されている例もあり、「イハ構へ」「イハ隠り」はそれと同様の例と見て[1]に入れた。なお、[2]の「イハダケル」は、死の忌避表現にあたる語「イハダケル」の該当例であり、「石城(いはき)に隠れる意」(時代別上代編)という意味で、岩の蔭に隠れてきらめく玉という意味をもつ[1]「イハ隠り」の例とは区別される。

第2表 万葉集イハ系列の語 用例一覧

[1] イハ+格助詞	[2] イハ+動詞活用形	[3] イハ+接尾語	[5] イハ+名詞	[6] 地名	[7] 植物名	
イハの上に2	イハガクリます1	イハネ14	イハカキヌマ1	磐城山1	イハコスゲ1	
イハの上の1	イハクエの1	イハガネ6	イハカキフチ3	磐国山1	イハツツジ2	
イハの神さび1	イハグクル1	イハホ12	イハキ(石木)3	岩倉1	イハツナ2	
イハの間を1	イハツツキ1	イハホロ1	イハキ(石城)1	岩代6	イハドカシワ1	
イハに苔生す2	イハダタミ1	イハムラ1	イハセ1	石瀬野2	イハホスゲ1	
イハに生ふる1	イハバシリ1	イハモト2	イハト3	磐瀬の社3	イハモトスゲ2	
イハに触れ4	イハバシル7	イハカゲ1	イハトコ3	石田1	イハキツラ 2	
イハもとどろに1			イハフネ2	石田野1		
イハ隠り1		[4] 接頭語+イハ	イハブチ1	石田の社3		
イハ構へ1		トキハ10	イハヤ3	石見6		
イハ踏み平らし2			イハヤド1	磐余5		
						合計
1	7	8	11	11	7	[1]～[7] 異なり語数 45
17	13	47	22	30	11	全用例数 140
[1]～[5] 合計 99例			[6][7] 合計 41例			

[3]の「イハネ・イハガネ」の「ネ」と「イハホ・イハホロ」の「ホ」は、それぞれ名詞として、前者は大地の中に固定し張っているもの、後者は表面や先端をさすが、接尾語として「岩」につく場合、それぞれ、どっしりと動かない岩と、あらわに地につき出た岩としての意味合いを保っているかどうか決めにくく、多くの場合、どちらも大きな岩全体を指すものと見られる。先行研究の歌解釈も概ねそのような理解を示している。「イハホロ」の「ロ」は接尾語で、上代の東国方言で「名詞、または形容詞の連体形に付いて、親愛の意を表し、また、語調をととのえるのに用いる」(小学館 デジタル大辞泉)とされる。

[4]の「トキハ」は、接頭語的な用法で永久不変の意を表す形状言「トコ」と「イハ」とを縮約した語で、いつまでも変わらぬ岩という意味を表し、そこから物事が永久に変わらないことの譬喩に用いられている。「岩」の永久不変の象徴的意味は、植物関連の歌や、[5]の「イハヤ」「イハヤド」など岩の構築物関連の語が用いられた歌にも見られる。

[5]は、主に岩の地形、構築物、岩周辺の空間などを表す語の集まりである。「イハキ」については、「石城」「石木」の区別があり、後者については外来文化の影響を受けた語で非情物を指していると、吉野政治(2018)に述べられている⁸。

8 「石木」の例は、吉野政治(2018)「第一章 日本の岩石観」の中で「仏典・漢籍の岩石観の受容」例として考察されている。

2-2. イハ系列語の部立別分布

万葉集は、その内容から相聞・挽歌・雑歌の三つの部立に大別され、巻15、巻17～20に収録されている部立ナシの歌と合わせて、四千五百余首の歌がある。広く知られているように、「相聞」は、相手の様子を尋ねて消息を確認する歌で、親子、兄弟、友人同士の間に贈る歌なども含むが、夫婦、恋人など男女の恋愛の歌が最も多い。「挽歌」は、死者を弔い、哀しむ歌で、万葉集の中で歌数が最も少ない部立である。「雑歌」は、くさぐさの歌で、天皇の行幸、狩猟や宴席など公的な儀礼で詠まれた歌や、花鳥風月などの自然風景、下層官人・庶民の言葉遊びなどの歌を含んでいる。万葉人が「岩」をどのような語を用いてどのような歌に詠み上げているのか、大まかな傾向を見るために、以下第3表と第4表で示す「岩」の歌および各語形の部立別分布から考察してみる。

第3表は、万葉集中の「岩」の歌の部立別分布を示すもので、第4表は「イハ系列語」の部立別用例分布を集計したものである⁹。二つの表は、万葉集巻首の配列順に従って、「雑歌」「相聞」「挽歌」の三大

9 万葉集各部立の歌数は、『万葉事始』『各巻一覧(佐佐木信綱『万葉集事典』による)』(毛利正守・坂本信幸[編], 和泉書院, 1995)に基づいて集計した。本稿の依拠テキストをはじめ、通行の歌総数にあたる4516首は『国歌大観』の歌番号に従ったもので、『万葉集事典』で示される歌総数の4536首と異なっているのは、底本の違いや、長歌を二分したもの、あるいは「或本歌」「一云歌」の取り扱いの違いによるとみられる。

第3表 部立別分布表 万葉集中の「岩」の歌（首）

部立 歌数・割合	雑歌	相聞	挽歌	部立ナシ	合計（首）
万葉集全歌数の部立分布	1560	1922	219	835	4536
万葉集全歌に対する各部立の割合	34.39%	42.37%	4.83%	18.41%	100.00%
「岩」の歌数（イハ系列語を含む歌）	32	37	13	11	93
「岩」の歌の各部立の割合	34.41%	39.78%	13.98%	11.83%	100.00%
万葉集各部立内における「岩」の歌の割合	2.05%	1.93%	5.94%	1.32%	2.05%

部立に「部立ナシ」を加えた順で項目を立てている。第3表における「岩」の歌合計93首と第4表における「岩」の歌句（「イハ系列語」の用例）合計99例とで、二つの表の合計数に微差があるのは、前に触れた、同一の歌にイハ系列語が複数あるからである。

第3表に示したように、万葉集中の歌を部立別で見ると、雑歌1560首、相聞1922首、挽歌219首、部立ナシの歌が835首あるのに対して、「岩」の歌は全93首のうち、雑歌32首、相聞歌37首、挽歌13首、部立ナシの歌11首を数える。「岩」の歌だけ見ると、各部立の分布割合は、相聞歌が39.78%で最も多く、その次が雑歌、挽歌、部立ナシの歌であるが、万葉集全体の各部立内の歌数を基にして見れば、「岩」の歌合計93首の万葉集中全歌数4536首に対する割合が2.05%となっているのに対して、挽歌においては「岩」の歌の割合は5.94%で、他の部立よりも一段と高い。つまり、部立別で見れば、万葉集の中で歌数が最も少ない挽歌の中に、「岩」の出現頻度が相聞や雑歌のそれより高いということが看取される¹⁰。

10 万葉集に「挽歌」と明示された歌の歌数について、井上さやか（2008）が整理したように、①類題に「挽歌」とあるのが218首、②歌の題詞に「挽歌」とあるのが11首、③左注に「挽歌」とあるのが9首で、①～③合計238首とある。本稿の集計で利用した『万葉事始』「各巻一覧（佐佐木信綱『万葉集事典』依拠）」と対照して見ると、第3表に見る挽歌219首は上記①に該当するもので、それ以外の②③は巻15, 17, 19に含まれている（本稿で言う「部立ナシ」巻該当）と看取できる。①の合計数とのズレは、巻7の集計数に現れており、底本か用例取り扱いなどの異同によるものと推測される。

語形レベルで万葉人が「岩」をどのような語を用いて歌に詠み上げているのか、ということを見る上で大まかな参考になるのが第4表である。

第4表（1）の横行からは、イハ系列語の各語の部立別分布傾向を読み取ることができる。[1]に見る「イハ」は相聞歌に最も多く見られる。[2]に関しては、全体13例のうち、雑歌に見る6例が最も多いが、それらは何れも「イハバシル」の例にあたる。次章で例示するが、「イハバシル」は雑歌以外にも2例あり、相聞歌1例、部立ナシの歌1例で計8例数えられ、[2]の中で使用頻度の最も高い歌句である。[3]は何れも「イハ+接尾語」を示すもので、語構成分類の中で、最も用例がまとまった形で集中している語群である。合計37例の内訳として、a「イハネ・イハガネ」が20例、b「イハホ・イハホロ」が13例、cその他が4例と三分できる。第4表では、[3]の用例分布を上記の三つに細分して示しているが、その部立分布をabc3つの合計で見ると、雑歌11例、相聞14例、挽歌7例、部立ナシの歌5例となっており、相聞歌に最も多く現れていることが確認できる。それに対して、[4]の「トキハ」は主に雑歌と部立ナシの歌に現れており、[5]の諸語は雑歌に最も多く見られる。

第4表（1）の縦列に示される、各部立内におけるイハ系列語の分布傾向を見れば、相聞歌の半数を占めているのは、[1]の「イハ」11例と[3]「イハネ・イハガネ」の9例である。相聞歌に次いで最も用例数の多い雑歌においては、[5]「イハ+名詞」の語が9例で最も多く、[2]「イハ+動詞活用形」の語が6例と続くが、[2]の6例は、先に触れたように何れも

第4表 (1) 部立別分布表 「イハ系列語」の用例分布

部立別 イハ系列語の分類	雑歌	相聞	挽歌	部立ナシ	合計 (例)
[1] イハ [格助詞後接例]	4	11	1	1	17
[2] イハ+動詞活用形	6	5	1	1	13
[3] a イハネ・イハガネ	4	9	5	2	20
[3] b イハホ・イハホロ	5	3	2	3	13
[3] c 他 (イハ+接尾語)	2	2	0	0	4
[4] トキハ	5	1	0	4	10
[5] イハ+名詞	9	7	5	1	22
合計	35	38	14	12	99

第4表 (2) 第4表 (1) 内の [3]c と [5] の各語の内訳

内訳	雑歌	相聞	挽歌	部立ナシ
[3] c 他 (イハ+接尾語) 計4例	イハムラ1 イハモト1	イハカゲ1 イハモト1		
[5] イハ+名詞 計22例	イハキ (石木) 2 イハキ (石城) 1 イハトコ1 イハフネ1 イハヤ3 イハヤド1	イハキ (石木) 1 イハカキヌマ1 イハカキブチ2 イハブチ1 イハセ1 イハトコ1	イハカキブチ1 イハト3 イハトコ1	イハフネ1

「イハバシル」の例にあたる¹¹⁾。そして、挽歌は、主に [3] 「イハネ・イハガネ」と [5] 「イハ+名詞」の語に集中している。

以上、イハ系列語の用例分布から、「岩」の語の万葉集中での現れ方を見た。次にそれらがどのように歌に詠まれているのか、その歌句表現から見てみよう。

11 「イハバシル」の歌句は、特に古来の名歌である、志貴皇子の「さわらび」の歌で知られ、その訓みと解釈に関する先行研究も古くから多い。本文と訓みの検討において、代表的な先行研究として、小島憲之 (1951)、大谷雅夫 (2013, 2021) が挙げられる。本文「石激」の訓みについて、賀茂真淵以後の通説では「イハバシル」となっているのに対して、大谷雅夫 (2013, 2021) は、「激」という文字の訓点資料における古訓、「ソソク」という語の「語感のうつりかわり」などの論拠を提示・補強して、平安時代の古訓「イハソソク」で訓むべきと主張している。本稿は、依拠テキストに基づき「イハバシル」という訓みで語の集計を取っているが、「イハソソク」という訓を支持する立場で見ても、二つの訓は動詞の相違で [2] の内部で語の集計数に変動を及ぼすことはあるにせよ、本稿の語構成の分類と [2] 全体の用例数合計に影響はなく、「岩」の現れ方の分類に支障をきたすこともないと思われる。

3. 歌句表現に見る「岩」の現れ方

歌句における「岩」は、人が行動を行い、そして動植物が生息する場所・空間であり、人の行動や自然の力の作用を受ける対象、そして人の目に映る対象として登場している。また、現実世界に存在する「岩」以外、観念上の場所・空間や象徴的な意味をもつ例も見られる。「岩」の歌句の中での現れ方をその働きから見れば、用例によって交差する場所があるが、大きく「動作・作用の対象」と「場所・空間」の二つに分けられる。

以下、上記の観点から見た [1][2] 全用例の歌句を部立別で示しつつ、[3][4][5] の複合語の分布傾向との関連についても一部例を挙げて簡単に説明する。語構成分類 [1][2] の該当例は、前掲「イハ系列語」の用例分布一覧 (第2表) では歌の一句のみで掲げているが、ここでは、「岩」の働きが弁別できる程度内で前後の句、一部は題詞を最小限度に添えて挙げる。部立は歌数の多い「相聞」から挙げており、部立内では [1][2] の語構成順で整列している。なお、末尾に「その他」として括った3例は、地名にかか

第5表 歌句表現に見る「岩」の現れ方―[1][2]の歌句全用例一覧

	番号	部立	語構成	歌句
動作・作用対象としての「岩」	1)	相聞	[1]	岩に触れ 君が砕けむ 心は持たじ (10・二三〇八)
	2)	相聞	[1]	岩に触れ 砕けてそ思ふ 妹に逢はぬ夜は (11・二七一六)
	3)	相聞	[1]	岩に触れ 覆らば覆れ 妹によりては (4・五五七)
	4)	相聞	[1]	岩の間を い行きもとほり (4・五〇九)
	5)	相聞	[1]	岩もとどろに 落つる水 よにもたゆらに (14・三三九二)
	6)	相聞	[1]	名欲山 岩踏み平し 君が越え去なば (9・一七七八)
	7)	相聞	[1]	名欲山 岩踏み平し またまたも来む (9・一七七九)
	8)	相聞	[2]	岩くえの 君が悔ゆべき 心は持たじ (14・三三六五)
	9)	相聞	[2]	岩ぐる 水にもがもよ 入りて寝まくも (14・三五五四)
	10)	相聞	[2]	岩そそき 岸の浦廻に 寄する波 (7・一三八八)
	11)	相聞	[2]	岩畳 恐き山と 知りつつも (7・一三三一)
	12)	相聞	[2]	石走る 垂水の水の はしきやし (12・三〇二五)
	13)	挽歌	[1]	道の辺近く 岩構へ 作れる塚を (9・一八〇一 過葦屋処女墓)
	14)	雑歌	[1]	岩に触れ 淀める淀に 月の影見ゆ (9・一七一四)
	15)	雑歌	[2]	石走り 激ち流るる 泊瀬川 (6・九九一)
	16)	雑歌	[2]	石走る 垂水の水を むすびて飲みつ (7・一一四二)
	17)	雑歌	[2]	石走る 垂水の上の さわらびの (8・一四一八)
	18)	部立ナシ	[1]	ごごしかも 岩の神さび (17・四〇〇三)
	19)	部立ナシ	[2]	石走る 滝もとどろに (15・三六一七)
場所・空間としての「岩」	20)	相聞	[1]	奥山の 岩に苔生す 恐れど (7・一三三四)
	21)	相聞	[1]	岩の上の 菅の根見むに 月待ち難し (7・一三七三)
	22)	相聞	[1]	岩の上に 立てる小松の 名を惜しみ (12・二八六一 或本歌)
	23)	相聞	[1]	岩の上に いかかる雲の かのまづく (14・三五一八)
	24)	挽歌	[2]	岩隠ります やすみしし 我が大君の (2・一九九 高市皇子挽歌)
	25)	雑歌	[1]	奥山の岩に苔生す 恐くも (6・九六二)
	26)	雑歌	[1]	岩に生ふる 菅の根取りて (6・九四八)
	27)	雑歌	[1]	岩隠り かがよふ玉を 取らずは止まじ (6・九五ー)
その他	28)	雑歌	[2]	石走る 近江の国の 楽浪の (1・二九)
	29)	雑歌	[2]	石走る 近江の国の 衣手の (1・五十)
	30)	雑歌	[2]	石走る 近江の県の 物語りせむ (7・一二八七)

る「イハバシル」の例にあたり、語源が不明とされているため、現時点では別枠のものとして示した¹²⁾。

第5表に示した歌句において、「動作・作用の対象」としての「岩」は、相聞12例、挽歌1例、雑歌4

12 「その他」に入れた「イハバシル」の3例は、近江の国、近江の県にかかる例であるが、かかる理由は不明とされており、溢水(あふみ)に通わせたとする説などがある(時代別上代編)。「泊瀬川」「垂水」「滝」にかかる「イハバシル」の歌句において、「岩」は水流の作用を受ける対象として解釈できると思われるが、近江の国、近江の県にかかる3例は、語源が不明である以上、その判断がつきにくいため、現時点では保留する。

例に見られ、その中で1) 2) 3) や 14) の「岩に触れ」、9) の「岩ぐる」、10) の「岩そそき」および 12) 15) 16) 17) 19) の「石走る」などのように、作用対象として水流を受ける岩の例が目につく。相聞歌では、12) の「石走る垂水の水のはしきやし」、2) の「岩に触れ砕けてそ思ふ妹に逢はぬ夜は」などのように、「岩」の堅固さや安定さと対照して、岩にあたってしぶきを揚げる水、激しい勢いで砕け散る水の様々な形態を恋の心情に譬えて詠む歌がある一方、雑歌の中では、14) の「岩に触れ淀める淀に月の影見ゆ」、17) の「石走る垂水の上のさわらび」などの

ように、自然または心の風景を構成する景物として詠まれている。同様の表現は、「岩根ゆも 通りて思ふ 君に逢はまくは」(11・二七九四)、「磐垣沼の水隠りに 恋ひや渡らむ」(11・二七〇七)など、[3][5]の諸語にも見られる。地形に因んだ歌句では、8)の「岩くえの 君が悔ゆべき 心は持たじ」、11)の「岩 豊 恐き山と 知りつつも」がある。前者は「くえ(崩ゆ)」を「悔ゆ」にかけて表現しているもので、岩が崩れるような、君が期待外れて悔いるような不実な心を持っていないといい、後者は、岩が幾重にも積み重ねたような近づき難い山を、身分が高く、はばかり多い人に瞥えて、それを知っていながら慕い求める気持ちを詠っている。

人の行動が直接「岩」に及ぼす例としては、6) 7)の「岩踏み平し」、4)の「岩の間をい行きもとほり」、13)の「岩構へ 作れる塚を」に見える。「岩踏み平し」、「岩の間をい行きもとほり」は、政務に参集するため、あるいは妻や恋人に会うために、苦勞して岩の多い険しい道、岩と岩の間を歩き来することを意味している。[1][2]の中では用例が少ないが、ごつごつとした岩の多い険しい道を踏み分けていく例は、「岩根踏み」「岩根さくみて」などのように、[3]の「イハネ」などにおいて多く見られる。「岩構へ 作れる塚を」は、岩を組み立てて作った墓を歌に詠んだ例で、ここでは「岩」は動作の対象になるが、死と他界に関する例は、主に場所・空間としての「岩」に見られる。

「場所・空間」としての「岩」は、[1][2]において、相聞4例、挽歌1例、雑歌3例に見られる。24)の「岩隠ります」は貴人の死去を意味する忌避表現にあたり、[1][2]の中では1例のみであるが、このような例は[3]の「イハネ」「イハガネ」「イハホ」の他、[5]の「イハキ(石城)」「イハト」「イハトコ」などの語を含む歌に現れており、古代日本の埋葬文化や神話との関連性が見られる。23)は「岩」の上空にかかる雲、27)は「岩」の蔭にきらめく玉を歌ったもので、それ以外の「岩」は何れも植物の生育場所として歌句に現れている。「岩」とその周辺の植物を題材に取り入れている歌には、植物を主体に歌うものとして、松を「待つ」にかけて、「菅の根」の「根」を「ねもごろに」とかけて表現するものもあるが、「岩」と植

物が一体となって神聖視する例も見える。20)の「奥山の 岩に苔生す 恐けど」、25)の「奥山の岩に苔生す 恐くも」に見る「奥山の 岩に苔生す」という歌句は、恐れ多いことを意味する「恐し」を導く表現にあたるが、前者の歌は、身分差で成就したい恋について詠んだもので、後者は歌の左注で分かるように、宴会で即興歌を作るようにと要請されたことを恐れ多いと表現し、歌らしい歌を思いつかないと謙遜して詠んだものである。この2例は、相聞と雑歌に分かれるが、「岩」を神聖視している点では共通していると言える。

また、[1][2]の「岩」の歌句において、「岩」の姿を描く語として、凝り固まってごつごつしているという意味の「ごごし」は、18)の「ごごしかも 岩の神さび(17・四〇〇三 和立山賦)」に見えるほか、「岩が根の ごごしき山に 入りそめて」(7・一三三二)、「神さぶる 岩根ごごしき み吉野の」(7・一三三〇)のように、[3]の「イハネ」「イハガネ」にも数例見られる。20) 25)に見た「恐し」と上記2例の「神さぶ」などの関連表現には、万葉人が岩に対して畏敬の念を抱いていることが反映されていると思われる。

4. 象徴的な意味をもつ「岩」の歌句表現

前章では、部立分類で歌の内容と関わらせながら、動作・作用の対象としての「岩」と場所・空間としての「岩」の観点で、[1][2]の語構成分類例に該当する「イハ」の歌句表現についての大まかな傾向を考察した。この章では、象徴的な意味をもつ「岩」の歌句を「イハネ」「イハホ」「トキハ」など、語構成分類 [3] ~ [5] の代表的な用例から例示する。

- (1) …やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太しかず 京を置きて こもりくの 泊瀬の山は 真木立つ 荒き山道を 岩が根さへき 禁樹さへき押しなべ 坂鳥の 朝越えまして 玉かぎる 夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に… (1・四五 柿本人麻呂 安騎野遊獵歌) / 雑歌
- (2) 大君の 任きのまにまに 取り持ちて 仕ふる国の 年の内の 事かたね持ち 玉梓の 道に出で立ち 岩根踏み 山越え野行き … (18・四一一六 大伴家持 広繩帰還宴) / 部立ナシ

- (3) 巖すら行き通るべきますらをも恋といふことは後の
悔あり (11・二三八六 人麻呂歌集) / 相聞
- (4) かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死
なましものを (2・八六 磐姫皇后 思天皇御作歌 四
首 その二) / 相聞
- (5) …今日か来む 明日かも来むと 家人は 待ち恋
ふらむに 遠の国 いまだも着かず 大和をも 遠
く離りて 岩が根の 荒き島根に 宿りする君 (15・
三六八八 杵岐嶋, 雪連宅満忽遇鬼病死去之時作歌)
/ 部立ナシ
- (6) 逆言の 狂言とかも 高山の 巖の上に 君が臥や
せる (3・四二一) / 挽歌
- (7) 豊国の鏡の山の岩戸立て隠りにけらし待てど来ま
さず (3・四一八 手持女王 河内王葬豊前国鏡山) / 挽
歌

「岩踏み平らし」の類似表現にあたるが、岩は険し
い山道、ひいては目の前を塞ぐ山そのものとして詠
まれていることは、上記(1)～(3)に示した「イ
ハネ」「イハホ」などの例からも分かる。用例(1)「荒
き山道を 岩が根 禁樹押しなべ」の「禁樹」は通
行を妨げる木で、険しい岩や行く手をさえぎる木を
押し靡かせて進んでいく勇猛な様子を描いている¹³。
用例(4)は磐姫皇后の歌として伝承された、万葉集
中の最古の歌として知られている歌で、恋しく思い
続けて苦しんでいる心情を、高山の岩を枕にして死
んだほうがましだと、耐える限界を超えた想いを切
なく訴えている¹⁴。「仮想」の「死」とはいえ、「岩」

13 安騎野遊獵歌群の構造と解釈、歌全体の象徴的意味
について、多田一臣(1990)、佐野 宏(2019)を参照した。
多田一臣(1990)は、「真木」や「禁樹」の立ち並
ぶ、けわしい岩石に覆われた「荒山道」は本来、人間の
立ち入ることを許されない神の世界」とし、「現実の世界
から異界へという、いわば時空を越えた世界に皇子が入っ
ていくことの意義を、このような表現を用いることで示
している」と述べている。佐野 宏(2019)は、当該歌群
の結びに「時は来向かふ」に焦点を当てた論考であるが、
現行の諸注釈と研究史の概観を踏まえ、「対象化される時
間と空間」の分析を通して、この作品の主題に見られる「予
祝」や「言霊」のあり方を論じている。

14 榎本福寿(2008)は、当該歌について「八、「恋ひ
つつあらずは」と死の仮想、「九、「かくばかり」をめぐ
る表現」、「十、「かくばかり」による八五、八六歌の相聞」
などで詳しく考察しており、また、当該歌群の特質につ

の歌句部分は、用例(5)(6)(7)の死の忌避表現
と共通して、現実と異なる別世界を表現していると言
える。前章で見た24)の「岩隠ります」も含めて、
これらの表現は、「岩」という場所・空間を現実世界と
異なる空間と捉え、死を別世界への移動と考えてい
る。

死や衰えに対抗する、永久不変の願望を「トキハ」
で表現している歌が、次の(8)(9)(10)などに見
られる。

- (8) 春草は後はうつろふ巖なす常磐にいませ貴き我が君
(6・九八八 市原王宴侍父安貴王歌一首) / 雑歌
- (9) …み雪降る 冬に至れば 霜置けども その葉も枯
れず 常磐なす いやさかばえに 然れこそ 神の御
代より 宜しなへ この橘を 時じくの かくの菓実
と 名付けけらしも (18・四一一一 大伴家持 橘歌)
/ 部立ナシ
- (10) 皆人の命も我がもみ吉野の滝の常磐の常ならぬかも
(6・九二二 笠金村) / 雑歌

(8)は、時の経過で移ろう春草との対比で「岩」
の不変性を引き出し、「イハホ」と「トキハ」とを重
ねて表現して詠んだ歌であり、宴席で父安貴王の安
泰をいつまでも変わらずにと祝った一首である。(9)
は常緑植物の「常葉(とこは)」と兼ね合わせて、永
遠の繁盛という祝福を歌に詠んでおり¹⁵、(10)は命
の永遠を祈願する歌で、吉野の滝そのものが常住不
変の象徴として詠まれている¹⁶。(8)において地質物

いて、『詩経』『玉台新詠』などの表現との類似性を言及
している。

15 用例(9)について、奥村和美(2015)は、聖武御
製歌にある実、花、枝、葉の要素を「全て覆うように詠
むことによって」、「御製を鋭く想起させようとする」も
のと捉えた上、四季の順に整え、各部位を緊密に構成す
る家持の表現に中国の詠物の詩賦に学んだ工夫が施され
たことや、御製が「いや常葉(とこは)の木」と特に葉
を取り出すのに対して、家持は四季おりおりの橘の栄え
が次々に連続して衰亡の相を見せないことに「常磐なす」
の永続性を見出しているということを指摘している。また、
根来麻子(2023)は、万葉集中の橘の実が一律、照
るものとして詠まれていることから、輝かしい色合いが
長く続くことがその永続の象徴となっていることを見出
し、その不老不死の葉としての役割や、天皇の御代の永
続性を言祝ぐ装飾としての役割についても考察している。

16 吉野の滝については、「イハホ」の用例に関わる論考

としての「岩」のイメージは、「巖のように永久不変でいらっしやるように」という表現から見いだせるのに対して、(9)(10)の「トキハ」は、植物や滝など他の霊力ある自然物にも用いられ、不変性の寓意がその他の自然物の素材的特徴によって拡大していると見受けられる。

5. おわりに

万葉集中の「岩」は歌の中にどのように現われているのか、万葉人が岩をどのように捉え、どのようにかかわっていたのか、本稿では、イハ系列の語を語構成や意味属性で分類した上、各語形の用例分布を部立別で整理しつつ、歌句表現の傾向から初歩的な分析を行った。歌句において使用頻度の高い語は、「イハ」、「イハネ」、「イハホ」、「トキハ」等である。部立分類で見れば、「岩」は相聞歌の歌句に最も多く現れるが、各部立内で占める割合と合わせて見れば、「岩」は挽歌に出現する頻度が高い。

万葉集の語や歌句表現から見る「岩」は、険しい道であり、行く手を阻む困難の象徴であった。万葉人は、水流をはじめ、自然の力の相互作用や地形に対する観察から、岩を堅固なものと捉えつつも、会いたい気持ちの強さで突き通せるもの、地形の変化で崩せるものと見て、歌にさまざまな心情を託していた。ごつごつした、近寄りたがい存在である一方、いつまでも変わらない、永遠の象徴でもある「岩」は、人間も動植物も共に生きる場所・空間であり、人や自然の力を受ける対象であり、人々の心を安らげる景色・景観の一部を構成するものであること、万葉人の生活と様々な関係をもっていた存在であることが看取できた。今後、万葉集中の歌一首一首の訓詁注釈をはじめ、古代歌謡、上代散文文献、日本と中国の漢詩文などにおける「岩」や他の地質的要素との比較も視野に入れて、日本文化における「岩」について理解を深めてゆきたい。

でもあるが、鈴木利一(1994)は、望郷を主題とした作品群の中の一詩として、「隼人の瀬戸の巖も鮎走る吉野の滝になほしはずけり」(6・九六〇 大伴旅人)の歌を取り上げ、躍動感に満ちた水の景としての共通性から「隼人の瀬戸」および「吉野の瀧」が対置された表現性、吉野の景としての「巖」の象徴的存在などについて考察しており、「吉野の瀧」に見る「常住不変」の象徴的意味についても指摘している。

文献

- 井手 至 (1959): 万葉語イハバシル・ハシリキ・ハシリデ。万葉学会『萬葉』, 第 32 号, 1-11。
- 井手 至・毛利正守 [校注] (2008): 『新校注万葉集』。534 ページ, 和泉書院, 大阪。
- 出田和久 (2006): 万葉集に詠まれた山—その景観認識をめぐる覚書—。奈良県立万葉文化館『万葉古代学研究所年報』(4), 102-118。
- 井上さやか (2008): 死者への歌・死者からの歌—『万葉集』『文選』の挽歌の作中主体。奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所 [編], 『万葉古代学研究所年報』(6), 31-45。
- 榎本福寿 (2008): 万葉集の磐姫皇后歌とその歌群の構成。佛教学国語国文学会『京都語文』, 第 15 号, 136-168。
- 大谷雅夫 (2013): 万葉集を読むために。『万葉集(一)』(岩波文庫), 495-531, 岩波書店, 東京。
- 大谷雅夫 (2021): さわらびの歌。『万葉集に出会う』(岩波新書 新赤版), 1-41, 岩波書店, 東京。
- 奥村和美 (2015): 大伴家持の「橘歌」—引用と寓意と—。『文学』, 第 16 卷第 3 号, 80-95。
- 尾山 慎 (2021): 『上代日本語表記論の構想』。356 ページ, 花鳥社, 東京。
- 小島憲之 (1951): 万葉集本文批判の惑る場合。関西大学国文学会『国文学』, 第 3 号, 1-11。
- 小島憲之・木下正俊・東野治之 [校注・訳] (1994-1996): 『萬葉集①~④』(新編日本古典文学全集 6~9)。小学館, 東京。
- 古典索引刊行会 [編] (2009): 『萬葉集電子総索引 CD-ROM』。塙書房, 東京。
- 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 (1998): 『萬葉集 本文篇』(補訂版; 初版 1983 年)。512 ページ, 塙書房, 東京。
- 佐野 宏 (2019): 言霊の構造。毛利正守 [監修], 『上代学論叢』, 415-437, 和泉書院, 大阪。
- 鈴木利一 (1994): 隼人の瀬戸の巖も—『万葉集』巻六, 九六〇番歌をめぐる一。『大谷女子大國文』, 27 号, 22-33。
- 多田一臣 (1990): 安騎野遊獵歌を読む—万葉歌の表現を考える—。千葉大学文学部日本文化学会『語文論叢』, 第 18 号, 3-14。
- 根来麻子 (2023): 『古事記』における「登岐土攻能迦玖能木実」の位置づけ。『上代日本語の表記とことば』, 295-316, 新典社, 東京。(初出は, 根来麻子 [2016]: 文学史研究, 第 56 卷, 15-30, 大阪市立大学国語国文学研究室。
- 毛利正守・坂本信幸 (1995): 『万葉事始』(1995 年初版)。123 ページ, 和泉書院, 大阪。

吉川宗明（2022）：『古事記』『日本書紀』『風土記』は岩石をどう記したか—奈良時代以前の岩石信仰と祭祀遺跡研究に資するために—。文化地質研究会『地質と文化』，第5巻第1号，1-71。

吉野政治（2018）：『日本鉱物文化語彙考』。468 ページ，和泉書院，大阪。